

# 知性という悪因

Ian McEwan の ‘Homemade’

国 本 豊 泰

作品にショッキングな話題や逸話が含まれていると、読者の注意を引きつける場合が多いだけに、あたかもそれらが作品の最重要テーマであるかのようにとりざたされるのは無理からぬところであるかもしれない。

Ian McEwan の処女短編集 *First Love, Last Rites* は、そういったショッキングな内容を多分に含むものである。この短編集に含まれる ‘Solid Geometry’ のテレビドラマ化の話が、恐らくは「ビン詰めのパニス」という小道具の存在をはじめとするそのショッキングな内容ゆえに、収録開始の直前に反故になったという騒動は有名である。そのこともあいまって、事実、デビュー時の McEwan は *First Love, Last Rites* で 1976 年の Somerset Maugham 賞を受けると同時に、‘shocking sensationalist’ という悪名も手にしたのであった<sup>(1)</sup>。

本論ではその *First Love, Last Rites* の冒頭に収められた ‘Homemade’<sup>(2)</sup> を検討してみたい。14 才の少年が 10 才の妹を相手に性的初体験をもつという内容のこの作品も、‘shocking sensationalist’ の看板に恥じないものと言えるだろう。

この「近親相姦」、「幼児との性交」という要素は確かにわれわれ読者に大きな衝撃を与えるものである。しかし、だからといってそういった逸脱的な内容がこの物語の主題となっているとは私には受け取りがたい。この物語の主題は「不良少年の非道徳的な初体験」にあるのではなく、その訴える内容はさほど逸脱的なものではないと私は考える。本論では、この

‘Homemade’ という物語がそのショッキングな外観の下で何を訴えているのかについて考えてみたい。

## 1

この物語は、一人称の語り手が自らの性的初体験を回顧する形になっている。妹 Connie との性交をすませ、バスルームで泣きじゃくる彼女を尻目に口笛を吹きながら満足感に浸っている 14 才の語り手の姿とともに物語は始まり、いかにしてその状況に至ったかが順を追って回想される。語られている事態は重大なものであるにもかかわらず、その文体には終始深刻な雰囲気は認められず、むしろふんだんにユーモアをまじえつつ事の顛末が語られることから、この物語の逸脱性・非道徳性が印象づけられる。

しかし、私がこの物語を非道徳的行為によって得られた満足の記録であると解釈できないのは、最後に語られている語り手の心理の中に、この回想録を文字どおりに受け取ってはならない可能性が表れているように思われるからである。それはやはり初体験をすませた喜びを描写した部分である。が、同時にその喜びを根本から覆し得るほどの力を秘めた影のようなものの存在をそこに感じずにはいられない。

This may have been one of the most desolate couplings known to copulating mankind, involving lies, deceit, humiliation, incest, my partner falling asleep, my gnat's orgasm and the sobbing which now filled the bedroom, but I was pleased with it, myself, Connie, pleased to let things rest a while, to let the matter drop.... I had made it into the adult world finally, I was pleased about that, but right then I did not want to see a naked girl, or any naked thing for a while yet. (p. 24)

語り手は、きっかけとして妹を ‘Mummies and Daddies’ の遊びに誘い込み、

夫婦が当然行うべき行為と称してまんまと彼女と性交渉をもつに至る。そのことを含めて彼は自らの初体験を「ウソや欺瞞をふくんだ不毛なもの」という否定的な表現を通して振り返っている。しかし、羅列されたこれらの否定的側面を認めたくえでなお、自らが‘adult world’へと一步を踏み込んだことに対する喜びは損なわれていない。いわば語り手は、ウソや欺瞞が含まれていることをさほど大きな問題とはとらえていないのである。

私が注目したいのはむしろ、‘I did not want to see a naked girl, or any naked thing for a while yet’ という感情の方である。この気分が何に由来するものなのかは具体的に語られないまま、この直後に物語は終わる。初の性交に満足しつつも、なぜその対象に満足と同時に嫌悪を感じなければならないのか。冷静で知的な印象を読者に与える語り手の口からも、このことは明確に説明されることがない。この謎めいた断片的な感情は、その正体が明らかにされないだけに、語り手の満足を文字どおりに受け止めがたくさせるだけの不気味な力をもった存在のように私には感じられる。

同じく *First Love, Last Rites* に収められた ‘Butterflies’ の中に、これとよく似た感情が描かれている。その場面を引用してみよう。‘Homemade’ と同じく一人称の語り手が、少女の手を借りて射精する場面である<sup>(3)</sup>。

‘Touch it, touch it.’ She reached out her hand and her fingers briefly brushed my tip. It was enough, though. I doubled up and came, I came into my cupped hands. Like the train, it took a long time, pumping it all out into my hand. All the time I spent by myself came pumping out, all the hours walking alone and all the thoughts I had had, it came out into my hand.... Her eyes were closed tight and the lashes were still wet from crying. I no longer wanted to touch her, that was all pumped out of me now,...

この異様で忌まわしい状況に至るまでのいきさつを説明する余裕はないが、語り手が抱く ‘I no longer wanted to touch her’ という感情は、射精後と

いう状況も含めて、‘Homemade’の語り手のそれと酷似していることは認められるだろう。

射精直後というのは、恐らく男性が性的情欲から最も自由である瞬間と言えよう。その時になって初めて、自分を突き動かしてきた情欲から解放されて理性を取り戻した語り手が自らの非道徳的行為を後悔し、その念が行為の対象である少女に嫌悪となって投影された、という一般的理解でこの感情を説明することはたやすい。しかしこの場合、その説明は必ずしも的を得たものとは認められない。

精液が象徴するものとして最も一般的なのは、その体外放出とともに失われるところの性欲であろう。しかしここでは、語り手の精液が ‘All the time I spent by myself’ をはじめとする、性とは異質のものに置き換えられている。この場面で注目したいのは、性欲がその実質的意味を失い、他のものの象徴に過ぎなくなってしまうという状況である。性欲の消滅と理性の回復が逸脱行為の対象への嫌悪につながる、という理解はここでは単純すぎるもののように思える。

‘Butterflies’の語り手の射精に如実に示されたこの性欲のすりかえは、‘Homemade’の語り手が抱く謎めいた嫌悪感を考える際に大きな示唆を与えてくれる。確かに普段の彼は Connie のことを ‘an ugly bat whom as a child I could hardly bring myself to look at’ (p.14) と評しているが、性欲の消滅が彼女の裸を ‘ugly bat’ に見せる平常心を回復させた結果として語り手は彼女の裸に対し嫌悪感を抱いている、という説明は彼にもまたあてはまるものではない。また、性欲の消滅によって彼が健全な理性を取り戻し、妹との性交という忌むべき行為を後悔と嫌悪の情をもって振り返ることができるようになった、という理解もまた妥当ではない。このことは、実際彼が射精後に後悔どころか満足を意識していることから明らかである。

‘Butterflies’の場合と同様に、彼の性欲もまた異質の何かにすりかわっているのではないだろうか。もしそうだとすれば、妹との性交という事件を引き起こした中心的動機は性欲ではないことになる。嫌悪の対象が ‘naked

girl' のみでなく 'any naked thing' にまで一般化されていることも、この事件の性格にはその外観よりも性的な意味合いの希薄なことを示唆していると理解できる。

妹との性行為に及んでいる最中の語り手の心理に、彼の性欲が何にすりかわっているのかが明らかになっている。

I wished Raymond could have seen me, and ... I wished Dinky Lulu could have seen me, in fact if my wishes had been granted I would have had all my friends, all the people I knew, file through the bedroom to catch me in my splendidous pose. For more than sensation, more than any explosion behind my ears, spears through my stomach, searings in my groin or rackings of my soul —more than any of these things, none of which I felt anyway, more then than even the thought of these things, I felt proud, proud to be fucking,... proud in advance of being able to say 'I have fucked',... (p. 23)

ここでの 'sensation' は性的快感を指すものと理解してよいだろう。この部分からも明らかなように、語り手を性交に駆り立てているものはこの 'sensation' への志向、すなわち性欲ではなく、自分が性交の経験をもったことを示したいという虚栄心である。彼を妹との性行為に及ばせる第一の動機は性欲を満たすことではなくなっている。性交の最大の動機としての性欲が、ここでは虚栄心にすりかえられているのである。

Lynda Broughton は、物語中の語り手の活動を、'male quests, the acquisition of knowledges and specifically male journeys from innocence to experience' という枠組みに当てはめて説明しつつ、性交の動機については次のように解釈している<sup>(4)</sup>。

It is the unknowability of the dark gothic mystery, woman, which

makes it desirable; once incestuously known, the female body is no longer desired and is left, ten years old and weeping, on the edge of the bath while the 14-year-old hero celebrates the success of his quest in glorious self-absorption, alone.

Broughton の解釈は、Connie との性交へと語り手を駆り立てる主要因が性欲でないと理解する点で、私の解釈と一致する。「虚栄心を満たすために経験したいという志向が生じる」と考える私の解釈と、「無知から経験への旅」という Broughton の提示する図式とは、決して無縁ではない。虚栄心と無知との間に深い関係があることは、彼の虚栄心が何に由来しているかという話題を通じて後述する。

しかし、Broughton の解釈にはどうしても看過しがたい大きな問題がある。彼女は「無知から経験への旅」を ‘male quests’ と呼んでいる。つまり、語り手の行動原理は「男性」という彼の属する性のそれであり、妹との性交という逸脱行為は彼個人の性格から説明されるべきものではないことになる。私が問題であると感じるのは、経験への志向を「男性」という一つの枠組によってタイプ化してしまうと、語り手と、彼が自分の性交中の姿を見せたい相手として真っ先に言及している Raymond という少年の間に差異が見いだせなくなることである。語り手と同じ性に属する以上、Raymond にも彼と同じ逸脱行為を犯す可能性があったのか。私は決してそうは思わない。

## 2

Raymond は語り手より一つ年上で、性・酒・麻薬などに関する断片的知識を伝授しつつ語り手を ‘adult world’ へとリードする役割を担う少年である。この物語において彼が非常に重要な人物であることは、物語の前口上にも明言されている。妹との性交について、語り手は冒頭で次のように語る。

... only lately have I fully realized that if this was the *end* of a

particular episode, in so far as real-life episodes may be said to have an end, it was Raymond who occupied, so to speak, the beginning and middle, and if in human affairs there are no such things as episodes then I should really insist that this story is about Raymond and not about virginity, coitus, incest and self-abuse. (p. 9)

Connie との性交がこの物語の主題であると解釈することへの懷疑を私がわざわざ表明するまでもなく、語り手はそれが主題でないことを実際このように明言している。確かに、Raymond に関するくだりは物語中の半分以上の量をさいて語られており、分量的には Connie との場面の描写を凌ぐものとなっている。しかし、残念ながら「Raymond が主題である」とする語り手の言葉の真意は本文中で明確に説明されていない。そのため、この言葉はカムフラージュに過ぎずやはり主題は語り手の初体験である、という解釈が存在しても無理はないというのが実情になっているように感じられる。

さて、語り手は Raymond と行動を共することを通じてさまざまな経験を得ていくのだが、物語中でこの二人は同類としてではなく、むしろ対照的な人物として語られている。自分が紹介する大人の世界の楽しみを語り手は要領よく味わうことができる反面、Raymond はいつもそれに失敗する。彼は、ウイスキーを飲んででは気持ちよく酔っ払っている語り手のかたわらで悪酔いのために嘔吐し、タバコを吸ってはむせて咳き込んでしまう。

語り手を妹との性交に駆り立てたそもその動機を、私は虚栄心であると解釈した。性交の第一の動機としての性欲が、虚栄心にすりかえられた形となっているわけだが、この虚栄心とは自分に性交の経験があることを誇示したいというそれであった。そして、この問題に関しても Raymond は重要な意味をもった人物となっている。

Raymond は、指のまげのばしという動作によって語り手にとって未知である性の世界の存在をほのめかす。そしてその結果、語り手は自分が童貞で

あることを初めて意識するのである。

I was made aware of and resented my virginity ; I knew it to be the last room in the mansion, I knew it to be for certain the most luxurious, its furnishings more elaborate than any other room, its attractions more deadly, and the fact that I had never had it, made it, done it, was a total anathema, my malodorous albatross, and I looked to Raymond, who still held his forefinger stiff before him, to reveal what I must do. Raymond was bound to know... (p. 13 省略は原文のもの)

性交の経験がないことは彼にとって忌まわしい事実であった。そしてその忌まわしきの反動として、性交を経験した自分を誇示したいという虚栄心が生じたと考えられる。

そして、その ‘anathema’ を抱える自分の前の Raymond という存在は語り手にとって脅威だったのである。語り手は当初、指のまげのばしの意味を悟ることができなかった。その段階で、語り手は Raymond に自分の無知を悟られまいがため、彼にどう接するのかについて細心の注意を払う。それは、‘I counted myself his intellectual superior—which was why I had to pretend to understand the significance of his finger’ (p. 10) という説明に見られるように、語り手が自分の Raymond より知的であることを自認し、彼より優位に立つことを常に重視していたからである。

その結果の ‘if I only held back a little, concealing, for pride’s sake, my ignorance, then shortly Raymond would reveal and then shortly I would excel’ (p. 12) という戦略には、「Raymond は知っているにもかかわらず自分は知らない」という状態を許容できない語り手の姿がよく表れている。また、‘excel’ という言葉は、Raymond に対する知的優越を意味するものである。常にその知的優越を維持することに努めている語り手にとって、その状態の崩壊という危機をもたらしかねないものとして自分が童貞である



という事実は忌まわしいものとなる。

こう考えると、語り手の知性という要素が、Connie との性交の主動機である「自分に性交の経験があることを示したい」という虚栄心の根源となっていることがうかがい知れる。Connie に性交の意義を問われて内心当惑しつつも、何とか性交への道を切り開こうとしていた時の自分の状態を、語り手は ‘My own uncertainty was obscured now by lust’ (p. 21) と振り返る。性交に関する知識の不確かさ、すなわち語り手の知的弱点を表す ‘uncertainty’ を ‘lust’ が補助するというこの表現にも、主体である知性に性欲が従属するという両者の関係がよく表れている。彼を禁断の性交へと駆り立てるものの中に性欲が皆無であったというわけではない。だが、意味的に重要なのはそれが性交にとって本質的な要素ではなくなっていることである。

常に失敗ばかりしている Raymond の姿にも、彼が知的な少年でないことが浮き彫りになっている。飲酒や喫煙を楽しめないことは体質に由来するものであるように見えるが、しかしもし Raymond がもっと賢い少年だったならば、それを「滑稽な失敗」という形で表面化させはしなかっただろう。対照的な存在として描かれている語り手と Raymond の違いの本質は知性に求められると私は解釈する。

一方、語り手は自分と Raymond との違いを次のような視点からも説明している。

... life was undeniably on Raymond's side ;... I sensed that in the cosmic array of individual fates Raymond's was cast diametrically opposite mine.... Raymond's mistakings, losses, betrayals and injuries were all, in the first estimate, comic rather than tragic. (p. 16)

このように、それぞれのもって生まれた運命という大きな規模の視点を通して、語り手は自らと Raymond との違いが決定的なものであることを読者

に印象づけている。この運命というのも、この物語を読み解くにあたって極めて大きな意味をもつ要素であるが、それについては後述する。

Broughton の「無知から経験への推移」という理解は、語り手の行為を説明するのにあたって全く不適切なものであるとは思わない。しかし、それを「男性」一般に還元してしまう点には抵抗を感じる。語り手とくらべて知的ではない、失敗ばかりの喜劇役者 Raymond の内面にも同様の ‘quests’ が展開していたとはどうも認めがたいのである。

Raymond が語り手と正反対の存在であるということ、そして二人の差異の根源である知性という要素を見過ごすわけにはいかないと私は考える。‘Homemade’ がその Raymond についての物語であるという語り手の明言もあり、この物語が何について語っているのかを理解するためには、Raymond との関係における語り手のあり方を考慮に入れることが不可欠であるように思われる。

### 3

語り手は、知的レベルにおいて自分より下である Raymond から ‘adult world’ に関する知識の手ほどきを受けるというアイロニカルな状況におかれている。しかし、知的な語り手はそうして得た知識から思索を重ね、恐らく Raymond には考えもつかない、独特の世界観を形成するに至る。

語り手は、Raymond が指をまげのばししてほめかす性の世界を ‘furnished chamber of that vast, gloomy and delectable mansion, adulthood’ (p. 12) と形容しているが、別の部分ではその魅力に満ちた大人の世界に否定的な側面をも見いだしている。自分が本屋で万引することによって楽に得ることのできる額よりもはるかに低い収入を手にするために、大人たちは汗水流して懸命に働いている。語り手はこれを ‘quiescent betrayal of a lifetime’ (p. 15) と呼んであざ笑う。そして彼は、クロスカントリー競技の中に大人世界のこの厭うべき側面の縮図を見いだす。入賞の

可能性が皆無であるにもかかわらず、苦悶に顔を歪めつつゴールを目指す競技者たちに、彼は ‘a vision of human futility’ (p.16) を見る。わずかな賃金のために働く大人たちと、着外のゴールを目指す競技者たちとを、語り手は重ね合わせているのである。

このように語り手は、大人世界の一面に強くひきつけられ、別の一面に嫌悪と侮蔑を感じる。しかし、この二側面が実は同じ一つの世界のものであるということを、彼は理解していないように私には読み取れる。彼は、無意味で退屈な世界を自分の憧れる魅力的な世界とは全く切り離してとらえているようである。

喜劇役者 Raymond は、もちろんクロスカントリーにも出場している。Raymond が口にする ‘Well, it was only a cross-country, only a game, you know’ (p.17) という敗者の負け惜しみは示唆的である。大人の世界での生活は現実のものであり、クロスカントリーのような ‘game’ ではない。両者の間に類似を見いだすことができたとしても、現実性という決定的な違いを無視することはできない。大人の性生活がいかに魅力的に見えても、それは例えば労働といった語り手には厭わしく見える要素をぬきにしては現実として成り立つものではない。もとより、Connie の、そして語り手自身の存在の根源も、この厭わしい要素を含んだ彼の両親の生活によっているのである。

Raymond の ‘only a game’ という言葉は、語り手の Connie との性交にもあてはまる。語り手の初体験は、自らが ‘the microcosm of the dreary, everyday, ponderous banalities, the horrifying, niggling details of the life of our parents and their friends’ (p.20) と呼ぶ、ままごとという ‘game’ の延長上に位置している。にもかかわらず、彼はそのことに気づいていない。彼は自分の初体験を一応は「欺瞞に満ちた不毛なもの」と認めてはいるものの、それが ‘game’ という非現実の枠組を出ないものであり、満足を感じることでできるような事実上の初体験にはなり得ないことを意識してはいないのである。この点で ‘I had made it into the adult world

finally’ という語り手の喜びの言葉はアイロニーへと堕ちている。彼は真の意味で ‘adult world’ へはまだ踏み込めていないのである。

McEwan の ‘Homemade’ についてのコメントは、語り手の初体験がどのような意味をもったものかを明らかにしている<sup>(5)</sup>。

I wanted to write a story about *total* sexual failure.... I wanted to write a first fuck story where the actual fuck would be abysmally useless and yet its narrator would foolishly still derive huge satisfaction from it. The bleak satisfaction being simply that he’d got his cock into a cunt and come.

‘Homemade’ はこの McEwan の思惑どおりに仕上がった物語であると私は考える。語り手は二面性をもつ大人世界のいいとこどりをしようと試み、それに失敗した。もとより、表裏一体の二面のうち一面のみを楽しもうというその試みが現実離れたものである以上、形だけを模倣した語り手の性交には何の意味も伴わない。

語り手は、Connie との性交を通じて自分が ‘that superior half of humanity who had known coitus, and fertilized the world with it’ (p. 24) というグループの一員となることができたと感じている。しかし、恐らくまだ子供を産むことのできない体である Connie との性交は、「世界を豊饒なものにする」行為とは程遠く、それこそがまさに ‘futile’ な行為と呼ばれるべきものである。クロスカントリーの敗者についての ‘the triumphant spirit of human losers who had run themselves into the ground for nothing at all’ (p. 17) という表現は、皮肉にも、‘futile’ な性交に満足を感じている語り手自身にそのままあてはまるとは考えられないだろうか。大人世界の魅力を味わったと錯覚している語り手の感じる満足には、‘human futility’ という彼の理解する大人世界のもう一つの側面が色濃く反映している。

性欲を第一義的動機としない語り手の初体験は、いわば性的でない性交と

もいうべきものである。虚栄心、すなわちそれが由来するところの知性が主動機の座を占めることによって性交の意義は歪められている。このことに加え、語り手の 'sexual failure' の意味には、Connie との性交という行為が実は非現実の枠組を出ない偽のものであり、嫌悪する 'human futility' に自らがはまり込んでいるという皮肉な結果も含まれると言ってよいだろう。

#### 4

語り手をこの失敗へと導いたものこそが、語り手を Raymond の対極におく「知性」ではないだろうか。

知性が動機の形成に影響を与えたことによって性交の意味は歪められ、語り手の初体験は形だけで内容の伴わない虚ろなものになっている。しかしそれだけでなく、そもそも性交の経験をもちたいという願望の実現を可能とさせたのもまた、彼の知性であると言える。彼は知的であるがゆえに、Connie を欺いて自分の性交の相手をさせるよう仕向ける巧妙な策を案出することができ、最終的に、その意味はさておくとしても、思惑どおりの結果を手にすることができたからである。もしこれが Raymond であったなら、欺瞞という複雑な手段によって目的を果たすことなど思いもつかず、いつもどおりの 'comic' な失敗に終わることが関の山ではなかっただろうか。

いわば、語り手には企てを成功させるだけの知性があったがために、妹との性交という忌まわしい事件を引き起こしてしまったのである。前に言及した語り手と Raymond それぞれのもって生まれた運命の対照性が、ここで意義深い。「人生は Raymond に味方する」とはどういうことなのか。それは、彼があらゆる悪巧みを成功に導くほどの知性を持ち合わせていないことと大いに関係する。もし成功させてしまったなら、そこには深刻な事態が生じてしまう。未遂の段階で失敗に終わらせるからこそ、彼はさしたる問題も抱えることなく、'comic' な、すなわちハッピーエンディングの人生を送ることができるのである。

回想録の形をとったこの物語中に、Raymond のその後を微かに匂わせる記述を見つけることができる。Finsbury Park でハトにガラス片を食べさせた逸話を紹介する際、語り手は 'Raymond, in his earlier, delinquent days' (p.12) という表現を使っている。語り手がこの物語を語っている時点において、Raymond はかつて彼が行動を共にしたころの不良少年では最早なくなっており、恐らくは彼が忌み嫌い、嘲笑した大人世界の住人になっていることが、この表現に暗示されている。

語り手と Raymond の非行の一例として、本屋で万引をしてその収穫を古本屋に売り払うという逸話が紹介されているが、この万引という行為は象徴的である。万引とは、労せずして実を得るという、いわば不条理で非現実的な財源であり、永続的にそれを活用し続けることは現実として期待できない。その財源を、Raymond は不器用であるために少年時代という一時の間でさえも使いこなすことはできなかった。そんな彼が大人になり、少ない賃金のために汗水流してまっとうに働いている様は想像にかたくない。

一方の語り手は、Raymond とは対照的に、その万引をうまくこなして楽に多額の収入を得ることができた。そして、彼はその錬金術のような非現実的財源を確保していたからこそ、労働という現実世界における正当な手段を「骨折りばかり多くて実入りの悪い 'futile' な行為」とあざ笑うことができたのである。いわば、「futile な大人世界」という語り手の世界観は非現実的な架空の基盤によって成り立っているものと言えよう。その世界観はそもそも彼の知性が形成したものである。そしてその上、賢く万引をこなすことによってその基盤を確保している点で、彼の知性が支える成功がその世界観を補強していると言える。その成功ゆえに、語り手は現実から逸脱した彼の世界から脱却することには思いも及ばない。

'vast, gloomy and delectable mansion' としてのみの大人世界という語り手の憧れの対象は、彼のこの歪んだ世界観の陽画のようなものと言えるかもしれない。「魅力のみの大人世界」も「futile な大人世界」も、所詮は現実世界の一面だけを拡大したものに過ぎず、それだけで独立した一個の世界

として成立し得るものではないという意味で、彼の作り上げた幻想に過ぎない。語り手の初体験は 'game' という非現実の枠組を出るものでないことは前に述べたが、本人はそれと気づいていないこの事態に、彼の幻想世界の破綻が既に表れている。

Raymond の非行が思春期特有の一過性のものである可能性は示唆されていたが、語り手についてはどうだろうか。彼はカフェで労働者たちが語る猥談に興味もわからないまま耳を傾け、将来の実用に供するための知識としてそれらを記憶しておいた。このことに関連して、彼が Raymond との日々の後にどのような人生を送ったかについての断片的な情報を、本文中から得ることができる。

I had on tap a complete education which ... earned me the reputation of being the juvenile connoisseur of coitus to whom dozens of males—and fortunately females, too—came to seek advice. And all this, a reputation which followed me into art college and enlivened my career there, all this after only one fuck.... (p. 14)

'a complete education' と呼ばれているその記憶しておいた知識のために、その後の語り手は性交の専門家としての名声を得たとある。この役割を果たしていた自分を満足げに回顧するこの部分には、虚栄心が性欲にとってかわった初体験における語り手の性に対する態度と共通するものがあるが、実際、この名声への道は Connie との性交が端緒となったと語られている。すなわち、その後少なくとも美術学校へ通うころまでの語り手は、自分の初体験が実質的には無意味なものであったことに気づかないまま、性に対する歪んだ態度を改めなかったことがわかる。

Raymond の人生が 'comic' なものならば、その対極にある語り手の人生は 'tragic' なものだということになる。そして二人の違いの本質が知性に由来するものならば、その知性こそが悲劇を引き起こす要因であることになる。

この物語で語られている事件、すなわち Connie との性交を、語り手の知性もたらした「悲劇」と呼ぶことは十分可能であろう。

しかし、その後の語り手がさらに悲劇的事件を次々巻き起こしたのではないかという悲観的観測には、それを否定するわずかな救いがあるように思われる。この話を語っている時点での彼がいかなる状態にあるかということは、彼の人生がどう運命づけられていたのかを知るための手掛かりとなるだろう。語り手がいつの段階でこの話を語っているのか、本文からは不明である。McEwan は語っている時点での彼を ‘a wizened sixty’ と想定している<sup>(6)</sup>が、少なくとも美術学校時代までは改められることがなかったと推察される語り手の態度が、語っている時点までに若干の変容を遂げたのではないかと考えることのできる根拠が一つある。それが、「これは Raymond についての物語である」という語り手の明言である。

Raymond が知的レベルにおいて語り手より劣った存在として描かれていることは事実である。が、だからといって語り手が彼に対してあらわな嫌悪や侮蔑を表明する箇所は本文中に見当たらない。むしろ、Raymond は愛すべき人格として描き出されていると感じるのは私だけだろうか。

‘Homemade’ が、知的ではないが愛すべき存在である Raymond についての物語だとすれば、その真の主題が何であるかを推測することはさして困難ではない。それは、Raymond のような愛すべき人間に対する賛美であると私は考える。彼の愛すべき性質は、知性という忌まわしい要素に毒されていない、その純粋な人間性に求められる。知性の汚染を受けていない人間は、語り手のように不毛な幻想にとらわれることなく、現実足に足を据えてこの世界を生きることができるのである。こう考えると、知的に劣った Raymond が語り手の教師役を務めるという役回りもあながちアイロニカルとばかりは言えない。知的に劣っているからこそ、その人生において Raymond は語り手の模範となり得るのである。

愛すべき Raymond の対極におかれた語り手は、いわば愛せない人格の持ち主である。知性という悲劇の種を抱えた語り手には人生も味方をするこ



とがない。しかし彼は、自らが語るこの物語の主題を自分の初体験の誇示ではなく Raymond におくと明言した。虚栄心からの脱却が見られるこの点で、語っている時点の彼が、少年時代の当時は気づいていなかった自分の失敗のもつ醜さと Raymond のもつ美しさを幾分でも悟っていると考えすることは不可能ではない。同じく知的な一人称の語り手である ‘Butterflies’ の主人公は、‘Homemade’ の語り手よりも一層深刻な悲劇を引き起こしている。悲劇の種となる悪因という知性の観念は ‘Butterflies’ にも共通すると私は考えるが、深刻さの度合いに差があるのは、‘Homemade’ の語り手のこの悟りが彼を決定的な悲劇から救ったためかも知れない。

当時の自分は知的であり過ぎるがゆえに、Raymond のような生き方を実践できなかった。‘Homemade’ はそんな自分自身への嘆きが込められた物語であると読むことはできないだろうか。そして、その嘆きを「裸のものを見たくない」という苦々しさとして物語の結末に織り込んだのではないだろうか。行為の意味に気づいていなかった当時の自分の心理には、不明瞭な形のいわば潜在的な嫌悪感としてその嘆きを投影することしかできなかったのである。

この物語はここまであからさまに性を、しかも極度に逸脱したショッキングな形で題材としつつも、その主題は決して性のみに限定はされない。一般に賛美の対象とされることが多い知性という要素を悪因としてとらえる視点こそ一風変わったものではあるが、この物語は「理想的な人間性の追求」という極めて正常な内容をもったものと読み解くことができるのである。

#### 註

- (1) Peter Lewis, ‘McEwan, Ian (Russell)’, *Contemporary Novelists*, ed. Lesley Henderson, 5th edn. (Chicago and London: St James Press, 1991). p. 680.
- (2) Ian McEwan, ‘Homemade’, *First Love, Last Rites* (London: Picador, 1976).  
以下、この作品からの引用はすべてこの版により、ページ数は本文中かっこ内に示す。
- (3) Ian McEwan, ‘Butterflies’, 上掲書 pp. 72–73。

- (4) Lynda Broughton, 'Portrait of the Subject as a Young Man: The Construction of Masculinity Ironized in "Male" Fiction', *Subjectivity and Literature from the Romantics to the Present Day*, eds. Philip Shaw and Peter Stockwell. (London: Pinter, 1991). p. 139.
- (5) Ian Hamilton, 'Points of Departure', *The New Review*, 5 (Autumn 1978). p. 18.
- (6) 上掲書 p. 18。